

それはある夏の夜のことでした

多くの場合において、新しくその土地にやってきた店は繁盛するもの（最初の一、二ヶ月に限っての話だが）だし、それゆえ最初の数か月のテナント料はどうかなるものだ。しかし私の店はどうだ。営業三日目にして客の入りは未だなく、したがって収入はゼロであり今月のテナント料の支払いは大変なことだろう。昨今はエアコン代も照明代も馬鹿にならない。扉の上のベルを眺めるが、鳴く気配はない。

「ベル。客が来なくても鳴きなよ。さみしいだろ？」
ぼやいても扉の上に止まったベルは、なにも答えず毛づくろいしている。養ってやっているのに薄情なやつだ、と文句を言つて床にモップをかける。料理屋にとつて清潔感ほど大切なものはない。木目調の床を磨き上げていると、キイと扉が鳴った。一拍遅れてベルも鳴く。

「キヤキヤキヤ」

彼はベルの変な鳴き声に驚いたように、肩を震わせベルを見た。ベルは天井を見て彼の視線を避けている。開けっ放しの扉から際限なく蟬の声と蒸し暑い熱気が入り込んできた。

「お客様、どうぞ、中へ。ドアも開きっぱなしのことですし」

わたしが促すと彼は躊躇いがちにベルから視線を逸らし、ドアを後ろ手に閉めた。モップを手早くバケツに戻し、まとめて角に押しやってカウンターに入る。初めてのお客様だ。焦る気持ちを抑えて、正面の椅子を指す。

「どうぞ、お掛けになってください」

彼は怖々とその席に着く。きよろきよろと視線を揺らし、店内を見渡している。そんなに変なものはいないと思うが、何か気になるのだろうか。

「いらつしやいませ。料理屋フェレイへようこそ」
定型のあいさつをしたが、彼はぼかんと気の抜けた顔をしている。この店については何も知らないようだ。私が次の言葉を言いあぐねていると、彼のお腹が鳴った。

「ちようどよかった。お腹が空いていらつしやるようですね。何かお作りします」

彼は軽く頷いて私を少し恥ずかしそうに見る。人はお腹が空くものなのだから、そう恥ずかしがらなくてもいいのに。

「何か、メニューはあるんですか？」

彼がそう聞いてきた。私の顔に変な笑みが貼りつく。「すみません、ウチにはシェフ、つまり私のお任せし

かないんですよ……。いや、でも何かこんな雰囲気が良い、とかなら聞きますよ。辛いものが良いとか、関東風の味付けが良いとか」

彼は私に怪訝な目を向けてくる。さつさと料理に取り掛かるべきだった。私はなんとか客を宥めるために言葉を出す。

「あ、安心してください。シェフのお任せは千円ポツキリですし、お口に合わなければお支払いして頂かなくてもいいですから！」

彼は諦めたように背もたれに背中を預けた。

「じゃ、がつつり系を頼めますか？ お腹が空いているので」

「かしこまりました」
軽く会釈をして、私は冷蔵庫の扉を開けた。

冷蔵庫の中にはエアコンが鎮座していた。

「これまた、大きな」

客に聞こえないように私はぼやいた。大抵は縄とか鉄とか小さなものが出てくる。エアコンは捌くのも大変だし、毒もあるし、大きいし、とにかく面倒くさい。でも冷蔵庫が出したのだから仕方ない。ペーパーだがエアコン調理も含めた第一種家電調理の免許は持っている。小さくため息を吐き、エアコンを抱えた。

ドン、とエアコンをまな板の上に置くと、客はギョ

ッと目を向いた。

「あ、アンタ、それはエアコンじゃないか？」

「ええ。そうですよ」

「なんでそんなモンをまな板の上に出しているんだ？ まさか、それを食べるとか」

私はわざとらしく咳払いをして客に向きなおる。

「ええ、そのまさかです。貴方にはこれを食べてもらいます。でも勘違いしないでください。これは食用です。食べられるエアコンなのです」

「そんなこと、信じられるか！」

客は音を立て椅子から腰を浮かせた。ここに来て初めての客を逃すわけにはいかない。私は慌てて送風口のカバーを折って口に入れる。何度か咀嚼して飲み込み、口の中を客に見せた。

「ほら、食べられたでしょう？ 食べられるエアコンなので。こんなのより最近話題のゴキブリ食の方がよっぽどゲテモノですよ」

送風口の角を小さく折って客に差し出す。

「よろしければ、どうですか。生のままでも美味しいですよ」

「ゴキブリじゃなくてコオロギな」

客は懐疑的な視線を向けながら、差し出したプラスチック片を受け取る。私は両手を挙げ視線を受け止めた。

「そんなに怖がらないで。心配しなくてもちゃんと美味しいですから」

覚悟を決めたのか、客はぎゅっと目を瞑りプラスチック片を入れる。一回目は恐る恐る、そのあとは思いつきり咀嚼し、飲み込んだ。

「美味しい……」

「でしょ！ 丁度肉と魚の合間みたいな味なんですよ」
客は領き席に座りなおした。これでエアコンの運び損ということにはならなそうだ。

「ではこのエアコンを捌いていきますね」

興味深そうにカウンターを覗き込む客に私は微笑んだ。エアコンの解体は大マグロの解体と似ている。マグロもエアコンも解体の手順がちゃんと決まっている。まずカバーを外し、フィルターと外側のカバーと中身にわけける。端を持ってカバーをめくっていくと、魚の皮をはがすように滑らかに本体とそれは分かたれていく。おお、と客が小さく感嘆する声が聞こえた。

「お客様は焼鮭の皮は食べるタイプですか？」
「ええ、まあ」

その返答を聞いてフィルターを料理の中に入れることを決めた。ほんの少し苦みがあるが、そのれを上回るほど凝縮された旨味があり、好きな人は好きな味だ。ちようと焼鮭の皮のように。フィルターを除けると銀色に光る機械たちが姿を現す。この機械は熱交換器や

ファンと呼ばれ、もちろん可食だが今日は使わない。毒抜き処理が大変だからだ。湯につけじつくりと煮出す必要がある。ちなみに煮出しているときの湯気にも毒が含まれるから、かなり骨の折れる作業になる。だが調理が大変な分、良い出汁が採れる。出汁はラーメンにピツタリなのだか、特に夏の天日にさらして濃縮した出汁を冷やし、つけ麺のタレにする絶品だ。どんな夏の暑さも吹き飛ばしてくれるような清涼感のある味わいになる。柑橘類を加えなくても、炎天下の中にあるコンビニくらい涼しい涼しい出汁になるのだ。

しかし今日は使わないので、ラップで包み冷凍庫に入れておくことにする。とりあえず目の前に並ぶ材料の調理をしなければならぬ。フィルターの網以外の部分、カバーの凸凹部分などを取り除いていく。これは魚でいう小骨のようなどころだから、残っていると口当たりが悪い。今日は生のままで提供するから慎重に掃除をしていく。

カバー部分は包丁を入れ一口大に切っていく。手首のスナップを効かせると、ギョギョしないので包丁が入る。エアコンには余計な筋がないから、水を切るようだ。長年熟成されてきたからか、切り口からは涼し気な柑橘系の香りよりも重厚な夏の暑い香りがする。

「懐かしい匂いですね」
客がそう呟いた。

「夏の匂いですからね。あと、これはお客様専用の食材ですのぞ」

客は微かに頷いて、私の手元に目を戻した。

「上手い……」

「シェフですから」

客はフツと鼻で笑った。そう喋っている間にカバーを切り終わり、フィルターの処理にかかる。

包丁をもう一本取り出し、フィルターをたたいていく。二本の包丁が踊るようにまな板の上を撥ねる。途中、こだわりの調味料も混ぜ込んでいく。夏の朝の芝生でとれる朝露、水出し麦茶の出がらし、ひと夏で発酵熟成まで終えた醤油……どれもこれも一級の調味料たちを混ぜながらフィルターをたたき。正直千円だと利益は厳しいものがあるが仕方ない。いざとなれば夜逃げする準備はできている。無心でフィルターを叩いていると、客が話しかけてきた。

「この仕事は長いんですか？」

「ええ、まあ」

「何年くらいになるんです？」

「さあ、どのくらいでしょうか」

ぼかした答えに、誤魔化さなくてもいいのにと客は苦笑した。誤魔化すも何も本当に覚えていないことなのだけれど、それは黙っておくことにする。

「そういえば、少し暑くないですか」

客は首元をパタパタと扇いだ。

「そうですね。一応冷房はついているんですけど」

横目でエアコンを確認したが、ちゃんと緑のランプがともっている。

「あと、水とかもらえませんか？」

見る間に客の額に汗の玉がいくつもできている。

「少々お待ちください」

冷蔵庫を開けると、二リットルのスポーツドリンクが目の前にあつた。コップに注いで渡すと、客はそれを一気に飲み干す。

「もう一杯、いや、ペットボトルごともらえませんか？」

私がペットボトルを差し出すと、客は少し強引にそれを受け取り、喉を鳴らして飲み干した。

「そんなに暑いんですか？ エアコンの設定温度下げましょう」

ベルに目配せをすると、ベルは飛んで壁にあるエアコンのボタンを操作した。

「……賢い鳥なんですな」

「鳥なのでしょいかね？」

ニタリと笑うと、客はからかった笑みを浮かべる。

「ハハ、何ですかそれ」

それをスルーして、私はたたき終わったフィルターのペーパーストを小皿に除けた。

食器棚からどんぶりを取り出し、炊き立ての白米を盛る。炊飯ジャーから出る蒸気は白米の匂いを纏っていて、何とも食欲をそそる。まな板に並んだエアコンカバーを器の端に沿って花が咲くように並べ、真ん中にフィルターのペーストを乗せる。最後に熱帯夜の中で産ませた鶏の卵の黄身をペーストの上に乗せる。

「お待ちせしました。夏のエアコン井です。混ぜてお召し上がりください」

どんぶりと箸とレンゲを乗せたお盆を客に差し出す。客はそれを両手で受け取る。客は額から汗の玉を滴らせながら手早く器の中身を混ぜて一口すくった。

「いただきます」

小声で客は呟き、レンゲを口に運ぶ。何度か咀嚼して少し目を見開き、そして二口目を口に運んだ。徐々に一口は大きくなり、どんぶりの中身は加速度的に減っていく。客は何も言わない。店の中には器とレンゲがぶつかる音と客の咀嚼音だけが響く。私は客がこちらを見ないのをいいことに、口角を限界まで緩ませた。私の料理がお気に召したようだ。咀嚼音のなんと甘美なことか。このエアコンは相当美味いらしい。ドン、と少し重めの音をさせて客は空の器を机の上に置いた。客の玉の汗は引き、代わりにじっとりとした汗が出ている。カウンターから出て、器を回収する。その間、客はじっと俯き、何か考え事をしている。私

が器を洗っている間も客は身じろぎもせず、俯いたまままだ。器を食洗器の中に放り込みスイッチを押したところで、客は顔を上げ絞り出すような声を出す。

「このエアコンは……あの部屋の」

私はそれが聞こえないふりをして、冷たい水を出す。どうぞ。暑そうなので」

しかし客は首を振る。

「祖父に、じいちゃんに、飲ませなかったのに、俺が」私は黙って水の入ったグラスを引つ込めた。客は焦点の合わない目で言葉を紡ぐ。

「じいちゃんが、あの日、水飲みたいって言ったのにお、俺はめんどくさがって、何もあげなくて。エアコンだって壊れてること、知ってたのに、何もしなくて。じいちゃんを、殺したのは。殺したのは」

「お客様」

私の言葉で客はハッと気が付く。

「すみません。なんでも、ないです」

「お会計、千円になります」

客は無造作に財布から千円札を取り出しカウンターの上に置いた。おぼつかない足取りで立ち上がり。ドアの前に立つ。しかし一向にドアを開けようとはしない。あの、エアコンって、じいちゃんの部屋のものですか」

客は振り返ってそう聞いてくる。私はそれを無視した。

「ありがとうございます」

一礼するとベルが扉を開ける。客は後ろ髪を引かれるようにその場に立ち尽くしていたが、諦めたように外に出ていった。

扉の看板をopenからcloseにして扉を閉める。裏の調理場に無造作にひっかけてあるガスマスクを手に取り、エアコンの中身と対峙した。中身は良い出汁が取れそうな銀に光っている。それをぶつ切りにして鍋に無造作に入れひたひたになるまで水を流し込む。ここからは弱火でじっくりと煮出していくだけだ。ガスマスクは相応に暑いし、コンロの前も熱い。換気扇を一番強く回して調理場からカウンターへと戻った。

ふと、今日の客のことを思い出した。彼が私の料理からどんな罪の味を感じたかは、知らないし興味もない。聞いたところによると罪の味は美味しいらしいから、きつと素晴らしい食事体験をしただろう。

ゆらりと鍋から灰鼠色の湯気が立った。この色が出たなら出汁の抽出は成功だ。

「熱中症にならないようにしないと」

ある夏の夜に亡くなった彼の祖父のように死ぬのはごめんだ。客が拒否したグラスに入った水を一気に煽る。灰鼠の湯気が一層濃くなった気がした。

フォーマルハウトの名の下に

閑古鳥は鳴きベルは鳴かない店内で、私は女性向け雑誌を読んでいた。いつかの客が私に貸してくれたものだ。何故だかうちの店に来た客は二度と店の敷居を跨がない。だからいつかの客がこれを取りに来る可能性は限りなく低い。雑誌は女性誌よろしく、秋の流星群の特集を組んでいる。りゅう座流星群、おうし座流星群、オリオン座流星群……。見ごろの時期から月齢までかなり細かく書かれている。感心ものだ。ついでと言わんばかりにページの片隅には、秋唯一の一等星であるフォーマルハウトについても書いてある。フォーマルハウトはみなみのうお座を形作る星の一つで、秋の南の空の低い位置に現れる、という情報しか載っていない。

そういえばこの雑誌を渡してくれたいつかの客もフォーマルハウトの話をしていた気がする。キッチン的高端に鎮座する本棚の中から料理帖を取り出す。これは今まで作ってきた料理のレシピやそれにまつわる話を書いてある。もちろんこの前の「夏のエアコン井」のレシピと話も。そこから何ページかめくると、目当てのレシピが出てきた。「切手パンケーキ」。そう題されたレシピを見て、いつかの客がありありと思いだされた。

「キヤキヤキヤ」

ベルが鳴いたのは秋風が少し身に染みるようになった日のことだった。コートを羽織って厚着はしているがミニスカートを履いているというちぐはぐな恰好の彼女はベルを見てもともと大きな目をさらに目を見開いた。

「いらっしやいませ」

私が声を掛けると、彼女はハッとこちらを向く。

「こちらへどうぞ」

カウンターを挟んだ対面の席を指をそろえて指すが、彼女はドア前から動こうとはしない。

「どうかされましたか」

私が聞くと彼女はこちらを見て、それから私の目から微かに視線を逸らした。

「あの……ここはなんのお店なんですか」

「料理屋フェレイ、という看板を掲げています」

彼女はホッと息を吐く。

「こちらへどうぞ」

いつもより心持ち優しめに微笑む。彼女はおずおずと席に近づき、すくと座った。

「すみません。外が寒くて、ここがopenになってるのが、みえて」

「そうですね。もう秋のころですか」

わたしはそう答えたが、彼女は会話を続けることはない。何かを探すようにそわそわと視線を彷徨わせるだけだ。

「あの、メニューは」

そう聞かれてやっと思いだる。

「あ、ああ。ここにはメニューはないのですよ。何でも作れますから、好きなものをおっしゃっていただければ」

彼女は目を丸くして私の胸辺りを見た。

「そう、なんです。すごいですね」

「ありがとうございます。それでは、何をお作りしましょう」

彼女は困ったように眉をしかめた。

「えーっと……」

彼女はこちらを見たまま苦笑いをするだけになった。優柔不断なタイプなのかもしれない。

彼女に背を向け冷蔵庫を開ける。冷蔵庫の中には一通のラブレターが入っていた。取り出してみると、それはまだ確かに熱を持っていた。封筒の真中にはオレンジとピンクのハートシールが貼られている。しかしそれが外された気配はない。

「パンケーキと暖かい飲み物なんてどうでしょう。今日は寒いですから」

彼女の方を振り返ると、彼女は虚を突かれたような

顔をしたが、こくりと小さく頷いた。

取り出したラブレターをまな板の上に出して細かく刻む。ラブレターは自身にこもった熱で端から少しずつ溶けかけている。とりあえず真ん中に包丁を入れラブレターを半分に分断。ペキヤと情けない音がしてラブレターは包丁を入れたところから放射状にひびが広がる。仕方ないのである程度ざく切りをして、別々のボウルに入れた。本当はラブレターの形状をそのまま使いたかったのだが、レシピ変更だ。一つのボウルには夜空の下で採られた牛乳を注ぐ。満天の星を映したようにキラキラと光る牛乳が美しい。混合物は親から子への愛と好意を寄せる人への愛との間の温度に収束していく。そしてラブレターと牛乳は少しずつ溶けあつて牛乳の白とラブレターの茶色がかつた赤でマーブルになっている。

もう一つのボウルには天空小麦の薄力粉と星屑入りのベーキングパウダーを入れる。ちなみ星屑の採り方はとても難しい。無風の夜中に湖の中に小舟で漕ぎ出して、湖に映りこんだ星屑を網で掬うのだ。星屑は一度乾燥させないと少しの衝撃で崩れてしまう。調弦直後のギターのように、衝撃を許さない雰囲気を持えた星屑を一つ一つ丁寧に掬い上げていかなければならない。そして白夜の太陽のもとに一日干し続け、星屑を固めやつと完成する。その星屑をふんだんに使ったの

が今入れたベーキングパウダーだ。星屑には悲しい時の涙くらい塩味と花の蜜ほどの優しく美しい甘さがある。これのおかげで砂糖など余計な調味料をいれなくても味ができてくる。そこに星屑を食べさせた鶏の卵を入れる。卵はうつつらと発光して神秘的だ。ほんの少しだけ眺めてからボウルに割り入れると、カッと強く輝いた。

「今の、は」

ガタリ、と音がして彼女が立ち上がった。

「ああ、星屑鶏の卵を割っただけです」

「ほしくず、にわとり」

「はい。星屑を食べさせた鶏なので卵が光るのですよ」

彼女は不思議そうな顔をしている。星屑鶏はあまり有名ではないのかもしれない。

「そういえば、お客様、先ほどからどのようなを読まれているのですか」

ボウルの中身を混ぜながら彼女に話を振る。彼女は椅子に座りなおしてパラパラと雑誌をめくる。

「情性で読んでいるだけなので……。えっと、星座の話が載ってるみたいですね。あ、そういえば、フォーマルハウトってご存じですか？」

私は首を振る。

「秋唯一の一等星なんですよ。まあ、私も知ってるのはこれくらいなんですけど」

「ほう、それは誰かの受け売りだったたり？」

彼女は顎を前に出すように頷く。

「はい。あの、聞いてもらえますか？」

私も顎を前に出すように頷く。

「ええ、もちろん。聞かせてください」

彼女は先ほどよりも少し大きく口を開く。

「フォーマルハウト、という名前を教えてくださいましたのは私が、好きな、いや、好きだった人なんです。流星群を見に行ったときに教えてくれて、『秋唯一の一等星なんだよ』って」

私が生地を混ぜながら曖昧な返事を打つても、彼女は気にせず話を続ける。

「千秋、私の好きだった人の名前なんですけど、千秋は星が好きの人だったんです。変わり者で、変な人で、全然顔が綺麗な訳でもないし、気遣いもできないし、無神経だったし……。好きになる理由なんて一つもなかったんですけどね。でも、好きになっちゃったんです。はは、馬鹿みたい。で、ラブレター渡そうとしたんです。フォーマルハウトを教えてくださいましたあの夜に。だけど結局渡せなくて。渡せなかったラブレターは捨ててしまっただけなんですけど」

「ああ、悲恋ですね」

「そうかもしれません。まだフラれてないんで言い切れないですけど」

「確かに。失礼しました」

いえ、と彼女は呟いて雑誌に目を落とした。生地の方はすでに混ざりきっていて、焼かれるのを今か今かと待っている。ゴムベラの動きを止め、四角いフライパンでいっかくじゅうのバターを溶かす。このバターはいっかくじゅう座からときどき降ってくるユニコーンの乳をバターに加工したものだ。少し酸味が効いていて、ヨーグルトのような風味である。スイーツ類の中に仕込むといいアクセントになる。

バターがフライパン全体に広がったことを確認して、一気に生地を流し込む。淡く黄色に光る生地は熱が加わったことで、それを自慢するようにより一層強く光る。

「わ、また光った」

「星屑鶏の卵を使っていますので」

彼女は私の言葉に疑問を呈することはなく、雑誌に目を戻す。星屑鶏の卵に含まれる光の元は卵のたんぱく質と星屑が合わさったものである。その為、生卵が固まるように熱で変性し強く光る。個人的にこの卵をレンジに入れたときの爆発を鶏卵星爆発と呼んでいる。レンジの中と調理場全てがキラキラと光るのだ。二度と見たくないとても美しい景色だった。

焦げた匂いが微かに鼻をかすめたところで、記事の下にフライ返しを差し込む。手首のスナップを効かせ、

フライパンを振り上げる。

「ほっ」

四角いパンケーキは空中で半回転し、またフライパンに戻る。

「おお」

彼女は小さく歓声を上げる。

「得意なんですよね」

「歴が長いですから」

そのままフライパンに蓋をして火を消し、余熱で裏面に火を入れる。その間にココアの準備に取り掛かる。すでにラブレターと牛乳は溶け合い、琥珀色をしていた。ボウルを揺らすとキラキラと光る。ゆっくりコップに注ぎ淹れ、表面に流れ星を削った粉をかける。優しい甘さが特徴の合法の白い粉だが、採取方法がとても厄介である。流星群の時期に長めの網を持って夜中に出掛け、空に向けて網を振り回すのだ。十回採集しに行つて一回小さな欠片が採集できるかできないかという辛い採集を乗り越えないと得られないものだ。まあ、毎年やつていれば腕に力が付くので、採集自体はだんだん苦にならなくなる。しかし、苦にならなくなる分、五分などでへばることなく、何時間も一身に空へ網を振り回すことになる。そんなことをしていると勿論、通報されてしまう。通報されるたびに流星採取許可証を警察の方に見せなければいけないし、その警

察の方が流星採取について理解してくれないことがほとんどだ。そこで時間を取られて効率的に流星を採集できない。そんな苦勞を超えて惜しげもなく流星の粉を使うなんて私くらいだろう。

ココアの準備を終え、フライパンのパンケーキを見るとキラキラと光り焼けたこと教えてくれる。皿にパンケーキをのせ、あとは飾りつけた。

まず小型の冷蔵庫から焼くときも使ったバターと生クリームと果肉がたっぷり入ったベリージャムを取り出す。皿に乗ったパンケーキにバターを塗る。ラブレターの熱のおかげで普通よりバターは溶けるのは早い。それを塗り広げるとシユワと音を鳴らしながらパンケーキに染み込む。バターの匂いが鼻を通って脳髓まで響き渡っていく。次に絞り袋で四角いパンケーキの右上に罌と数字を書く。あとはラズベリーのジャムをパンケーキに塗り広げ、上から流星の粉をかける。金にきらめくパンケーキと仄かに銀に光る流星の粉が優美である。最後に生クリームを山のように盛り付け、皿とコップをお盆に乗せて彼女がいるカウンターにもっていく。

「お待たせしました。切手パンケーキです。こちらのナイフとフォークを使ってお召し上がりください」
彼女の右側にシルバーを置いてゆく。彼女はほんやりと口を開けてみている。

「キラキラだ……」

「星にまつわるものばかりで作られていますから」

彼女がシルバーを持ったのを確認して、キッチンに戻る。ラズベリーのジャムがスプーンに少しついていたので、彼女にバレないようにスプーンを舐める。おいしい。とても。ラズベリーらしい酸味とジャムを仕込むときに使った、乙女座から落ちる女神の涙で作った砂糖の甘さが舌に染みわたる。このラズベリーを採りに行ったことを思い出す。星乙女の砂糖の甘さに負けない強い酸味を携えたラズベリーが必要だった。これを作っている農場の人が偏屈で……。

「あの」

ラズベリー採取の思い出に浸っていると彼女から声が掛けられた。スプーンをシンクに放って客の方に向き直る。

「なんで切手なんですか」

口の端にキラキラと光るココアを付けながら彼女が聞いてくる。

「私の好きな、というか言葉の勉強に使った本がありまして……」

裏に戻り、一冊の本を取り出す。

「この本に載っている短歌に『そのラブレターに足りないのは勇気という唯一変えない切手』というのがあ

その短歌が書かれているページを探してしおりを挟みこみ、本を差し出す。

「『あなたのための短歌集』、木下、龍也さん？」

彼女は受け取った本の表紙を見て題名を読み上げる。「ええ。現代歌人、の感性は面白いですよ。時代の要請にこたえていて」

彼女は葉が挟まれたページを開き、短歌を詠む。そして少し逡巡してから、バツと顔を上げた。

「あの、私と会ったことと違ってありますか？」

「いいえ」

「じゃあ、なんで、このパンケーキの中に、こんなハートが入ってるんですか」

彼女はパンケーキの中からオレンジとピンクのハートを取り出す。

「これ、私がラブレターに貼ったシール、みたいで」

「そりゃ、これには貴方の書いたラブレターを使っていますから」

彼女は懐疑的な視線を送ってくる。

「食べられますから。健康に問題はないです。エディブルです」

「全然、意味が分からないんですけど」

思わず腕を組んで考え込んでしまう。食べられるのだから食べられるのだ。海が広いように、太陽が照る

ように。

「食べられるのだから、食べられるとしか」

「でも、なんで私のラブレターが。家の引き出しにあるはずなのに」

「うーん。私には何とも」

彼女はちらりと渡した本に目を戻す。

「私のこと、何にも知らないのに、なんでこんなピツタリなもの出せるんですか」

彼女の眼球が反射する光が多くなって、初めて彼女が泣きそうなのだとわかった。泣かれるのは慣れていない。

「あの、えっと」

私がポケットの中のハンカチを差し出そうか悩んでいる間に、彼女の頬には雫が垂れる。それにも構わず彼女は大きくパンケーキを切って、口を開け頬張る。

「美味しい……」

しゃくり上げながらも彼女の皿からはパンケーキがなくなっていく。そしてココアを味わうことなく一気に煽る。自分の目が丸くなったのを感じる。もつたいない。味わってとは言わないが、でも飲み方があるだろう。流星の粉もかけたのに。

「ありがとうございます。あの、お代はいくらですか」
「千円になります」

彼女は財布の中から千円札を取り出し、机に置く。

「すみません。うちはレジがないんです」

客の横に行き、お札を受け取るついでに本を渡す。

「この本、貰ってください」

彼女は驚いた顔をしている。

「いや、もらえません」

「私は使いませんから。それに、ラブレター、渡されるのでしょうか？」

彼女は息をのむ。

「私から切手を発行いたしましたので、貴方にはもうちゃんと勇気があるはずですよ。この短歌集で勇気を出していたければ嬉しいですよ」

私が笑うと、彼女はまた泣きそうな顔をする。

「あの人は私のこと、まだ好きでしょうか。意気地なしなのに」

私は曖昧に笑う。人間関係は私の理解の範疇ではない。彼女は別に私に否定も肯定も求めていなかったように、首を振る。涙の痕はあるが、目にはもう涙の膜はない。

「この本は、貰うんじゃないかと、借りることにします。えっと、代わりにこの雑誌をお渡しするので」

彼女が私に雑誌を差し出す。私はそれを受け取って一札をした。ベルが扉を開ける。

自分の唸り声と体の痛みで目が覚める。いつのまに

か寝てしまっていたみたいだ。窓から外をチラリとみる。もう外は真つ暗で星も見えそうだ。

彼女は手紙を渡せただろうか。フォーマルハウトの名のもとに光る星空はさぞ美しいだろう。雑誌をめくりながら、私は彼女がまたやって来ることを、期待せず待っている。